

北日本大震災 日産婦災害派遣 報告書

2011年4月3日

順天堂大学 松岡正造 興石太郎

3月18日

東北地方への緊急支援に対し有志を募る旨竹田教授より全医局員に通達あり。災害時であり、有志のうち男性医師・認定医以上の者を選抜。

3月19日

派遣先は県立宮古病院と決まり、須賀・金田出発

3月23日

県立宮古病院への順天堂における支援は第1陣で終了とし、第2陣以降は気仙沼市立病院への支援と決定。

3月25日

22時 復興支援バスとして運営されている高速バスにて仙台に向けて出発。

3月26日

5時 仙台着。仙台市内は電気は通っているものの、電車の運行はなく、早朝ということもあり車はまばら。仙台駅で東北大学病院に向かうため30分タクシー待ち。タクシーの運行台数も少ないよう。



写真 到着時の仙台駅前 車もまばら

6時 東北大学病院着。早朝にもかかわらず宇都宮医局長に出迎えていただく。東邦大学病院は電気・水道・ガスは復旧しているものの、ガスはつい1日前より開通。周辺の住宅はガスの開通ははまだ始まっていないようで、医局の先生方も病院でシャワーを浴びている状態。到着当日も早朝はガスが使用できたものの、9時以降は使用不可となる。産婦人科医局は従来の建物が地震による倒壊の恐れがあるとのことで病棟に臨時で設置されていた。12時に東北大一気仙沼の定期バスが出るとのことで、医局の仮眠室で休憩をとる。出発前、八重樫教授に面会し、東北沿岸地域での津波の被害などについて説明を受け、握り飯、缶詰をふるまっていただく。

12時 東北大出発

15時 気仙沼市立病院着。



到着当時の気仙沼市立病院の状況：

病院は高台のため地震・津波による直接的な被害はなし。地震後4日目までは周囲が停電であったため、電気が復旧するまで自家発電による電気のみで、分娩室も使用できず、分娩は手術室で行っていたとのこと。電気が開通したのちはプロパンガスも供給され水道・電気・ガスは使用可能となった。携帯電話は震災3日目までは不通。現在 docomo、au のみ通話可能。Softbank は不安定。有線電話・LANは使用可能。

気仙沼市は人口約75000人で、地震・津波による被害は現時点で死者500名以上、行方不明者1500名にのぼる。気仙沼市内の産婦人科は、開業医2件と市民病院で分娩を行っていたが、津波により開業医2件が被害にあったため、市民病院のみで産婦人科診療を受け持つこととなった。震災当初は、母子手帳も津波でながされて、身一つで病院の前に立っている陣痛発来の妊婦や、津波でのドロドロの母子手帳を持参する妊婦もいたようである。震災当初にハイリスク妊婦を6-7名東北大にヘリ搬送を行ったが、現在、開業医からの妊婦を会わせて、40-50名/月の分娩のペースである。気仙沼市立病院は震災後3日間外部との連絡が取れない状態であり、産婦人科科長と東北大産婦人科との携帯での連絡が外部との初めての通信であった。

震災当初は救急患者の診療のため、全科をあげてトリアージと救急治療を行っていたが、我々が到着した時点では、病棟は分娩および緊急手術のみなものの、通常外来業務を再開し始めていた。内科外科などの一般診療に関して、避難所などはD-MATが主に担当し、市民病院では入院が必要な患者を診療する体制となっていた。内科・外科などには、東北大との1日1便の定期バスがあり、毎日東北大学から応援医師が数名交代で来ていた。

病院スタッフのうち、100名以上は自宅が津波による被害を受けており、親戚や知人の家で寝泊まりをしているか、病院で寝泊まりをしている状態。医師も被害を受けており病院あるいは周辺のホテルで寝泊まりをしている。周辺の不動産は大部分が津波の被害を受けており、使用可能な

部屋はほぼすべて予約済みである。気仙沼の市街地中心部はほぼ壊滅しているため、不動産は枯渇している。仮設住宅などが建設され始めるまではこの状態が続くと考えられる。

食事は医局で他科の応援医師とともに我々にも支給してもらえることとなった。震災当初はおにぎりを1日2個程度支給されるのみであったようだが、我々が到着後全期間を通じておおむね朝：パン、(おにぎり) 昼：おにぎり、魚などのフライ(2日目以降は弁当) 夜：おにぎり、副菜1品、みそ汁(我々が到着まではなし)であった。ただし、我々が出発する当日には食堂が開業し、4月2日以降は医師への食事の支給は基本的に中止する予定。

我々の寝場所は病棟内の個室と病棟エコー室を使わせもらえる事になった。

病院到着後、医局にて産婦人科科長宇賀神先生、重田先生と面会。2人とも住居は津波の被害にあっており、重田先生は浸水のため自宅へは入れない状態。震災後は病院に寝泊まりしていたとのこと。宇賀神先生も部屋は無事なものの、電気・水道・ガスは通じておらず、ほぼ病院に詰めている状態であった。2名とも若いドクターであり、使命感に燃えているため表面上は元気なようであったが、震災以後、2名のみで産婦人科業務を2週間以上行っており、長期間の病院生活に疲労が蓄積しているものと考えられた。病棟・外来を案内してもらったのち、業務内容を確認。基本的には外来・病棟業務の手伝いと、当直業務を行い、常勤医の負担軽減を行うこととなった。平日となり、外来業務などがスムーズに行えるようになれば、常勤医1人ずつ2-3日の休暇を取っていただくこととなった。



写真 病棟スタッフと

後列右：宇賀神先生 中央：松岡 左：重田先生

16時

到着後、気仙沼市立病院付近を散策。病院周辺はやや高台となっているため、家ごと流されたといった場所は見当たらなかった。ただし1階部分は、どの家も浸水したため、街はほぼ機能しておらず、開いている店はない。自衛隊のおかげで車道の瓦礫は端っこに寄せられていて車は問

題なく通行出来るが歩道はヘドロだらけで 200m くらい歩いたところで靴が重くなり、滑りやすいためそれ以上は進めず帰院。病院内と周辺の日中の治安は問題ないよう。



写真:病院周辺 道路の周囲はヘドロが堆積。左の車は駐車ではなく、津波で流されてきている。

帰院後、当直業務開始。松岡・興石の順で交代にファーストコールを行うこととする。松岡ファーストコール

3月27日

8時

病棟回診

朝食後市内へ。大川より南気仙沼駅周辺へ入る。道路は自衛隊によりがれきの除去はすんでいるものの、周囲は焼けただれた瓦礫の山のみで空襲の後のよう。木造の建物はすべて材木となっており、鉄筋コンクリートの建物の外壁のみが残る。ビルの3階部分まで津波の跡があり津波の大きさを物語る。この地域は津波の被害の後に火災によりさらに被害が広がっている地域で、病院から直線距離としては約300メートルというところ。火災は大川でせき止められたようである。その大川にも材木、家、自動車、船などが多数沈んでおり、津波が川を遡上してきたことが分かる。私は神戸で阪神大震災を経験しているが、被害の様子が阪神のそれとはまったく異なっており、震災自体よりも津波による被害が大きいことを実感した。



写真：左 津波により建物の上に押し上げられた家屋 右 南気仙沼駅 ホームの屋根のみ

14時 分娩停止にて緊急帝王切開。

夕方より興石ファーストコール。

3月28日

8時 病棟回診

8時30分 外来開始

大部分が妊婦である。気仙沼市内の他院で妊婦健診を受けている妊婦が半数以上。母子手帳を持参しているが紹介状はなし。半数以上の患者の家族に津波の犠牲者がおり、震災の話題に関してはかなりナーバスとなっている。午前中の来院患者数は約50名。常勤医1名、我々2名で外来を行う。

外来中 病棟にて1名吸引分娩。

外来終了後、宇賀神先生休暇へ

午後、分娩停止にて緊急帝王切開。震災前より麻酔科医不在のため産婦人科医にて腰椎麻酔施行。

夕方より松岡ファーストコール。

3月29日

8時 病棟回診

8時30分 外来開始

来院患者数約40名、来院者内容変わらず。妊婦初診（他院でフォロー中）が約8割。予想に反し妊娠中期などの妊婦で他府県への避難のため紹介状希望などはほとんどいない。このまま地元での出産の妊婦が残留すれば、長期的には気仙沼市立病院の分娩数は増加すると考えられる。現在のところは、分娩数の急激な増加には至っていない。外来ではほぼ正常妊婦が多い中、TTT S疑いの妊婦がいたり、卵巣癌が疑われる婦人科患者が初診でいたりして油断できない。

外来後、受診希望患者ちらほら。現在、外来時間外であっても、婦人科受診希望の患者はすべて診察を行っている。

夕方より興石ファーストコール 深夜帯 4300g 経膈分娩。

3月29日

8時 病棟回診

8時30分 外来開始

外来患者数約40名。この日より妊婦とともに、子宮脱、癌検診結果などの婦人科患者も受診し始める。避難所などにいる方は受診できないので一概には言えないが、周辺地域住民の状況がやや改善してきている印象。

ただし内科には肺炎の高齢者が急増しているようで1日30人程度入院してくるとのこと。内科Drによると劣悪な避難所生活とヘドロが乾いたことによる砂ぼこりが関係しているであろうとのこと。高齢者の罹患がほとんどで、入院して数時間で死亡してしまうケースもあり、災害による2次的な健康被害が弱者から出てきているようである。

午後は分娩進行者がいなかったので常勤の重田先生宅の被災状況を見学。病院からわずか300mだが1階のため津波の被害を受けた。浸水は約2メートルでベランダのガラスが割れ、家の中はヘドロだらけ。車は200~300m流され、電信柱と絡まった状態。エンジンはかからず車内はヘドロだらけ。

気仙沼市内のガソリンスタンドは少数であるが開店してきており、来院できる交通手段が使えるようになってきたと考えられる。主要道路はほぼ使用可能であるため、自動車如果使用できれば、市民の行動範囲も広がると考えられる。周辺の店舗は少しずつ開き出しており、食料や日用品などは入手可能となってきた。病棟などには、自宅が被害にあい親戚などの家に避難している方もおり、病院周辺で入手した食料品などを病棟に差し入れる。

夕方より松岡ファーストコール

3月30日

8時 病棟回診

8時30分 外来開始

外来患者数約40名。患者のなかにはサーバリックス注射の患者も数名。

午後より、歩いて松岩地区へ。病院からは東浜街道沿いに山を越えては入ることができる。松岩地区は、海岸から約1キロにわたって平野で山と接している地形だが、平野部は津波で壊滅。平野部の家や瓦礫は、山の麓に打ち寄せられており、現在も自衛隊により瓦礫の撤去が行われている。瓦礫のそこかしこには家財を探す人や、行方不明となった家族を捜していると思われる人影が2週間を過ぎた今もみられた。

夕方より興石ファーストコール。

3月31日

8時病棟回診

8時30分より外来

外来患者数約40名。患者内訳は変わらず大部分は妊婦健診。過多月経の患者が外来待合にて意識消失。前後に大量に出血認めていた。内診にて約5cmの筋腫分娩、採血にてHb 4g/dlと貧血を認め、緊急入院・手術の方針となる。

12時 宇賀神先生帰院。



写真 外来にてリフレッシュを終えてさっぱりとした宇賀神先生と重田先生、外来スタッフ

16時 東北大学病院との定期バスにて仙台へ

19時 仙台着 八重樫教授、宇都宮医局長に報告。夕食をごちそうになり夜行バスにて東京へ。

まとめ

病院の電気・ガス・水道などは問題なく使用可能。4月4日からは給食は終了して昼食は食堂でとる。朝・夕に関しては自己調達になるよう。現在病院周辺の商店も開き出しており、食料も現地調達可能と考えられる。

病院は平常業務に戻ってきており、定期手術などは行われていないが、産婦人科では外来、病棟などはほぼ通常通り稼働。ただし、内科は避難中の高齢者の肺炎などが多く、いまだに外来は休診となっており、救急のみ取り扱っている状態。

展望

今後病院業務全体が通常化していくに従い病床などは本来の入院患者が使用するため、病院スタッフが病院で寝泊まりしている現状を考えると、2名の医師が宿泊する場所がなくなるため2名ずつの派遣より1名ずつの派遣が望ましいと思われた。産婦人科の業務自体は医師が2~3名いれば十分と考えられるので、常勤(1~2名)と応援医師1名で業務可能。4月3日より産婦人科学会矢野先生より連絡があり、気仙沼でビジネスホテルを1室確保したため、応援医師は日勤2名、夜勤1名で対応することとし、1名はホテルでセカンドコールとして待機の形が望ましい。

震災以前まで2名体制で分娩30-40件を行っていた施設であり、震災後分娩数は増加傾向であるが、短期的には2-3名の医師で対応可能と考えられた。常勤医は非常に優秀な若手医師なので、十分な休養をとり体力が回復すれば週数回の応援医師の派遣で対応可能と考えられる。

雑感

食事などは全科共通の医局で摂るが、東北人の気質からか他科の医師とのコミュニケーションをはかろうとすると反応が薄く非常にシャイな印象を受けた。産婦人科常勤医とは感じなかったが、内科や外科では大学からの応援医師やD-MATスタッフと常勤医との間に壁を感じるが多かった。短期的な派遣の場合、他科との連携のためには常勤医を介したコミュニケーションが必要であると考えられた。